

介護等体験における自己達成感に関する研究 ——社会福祉施設での体験から——

梅 澤 嘉一郎*

A Study Concerning a Sense of Attainment toward Self-goal through Experiences on Nursery Care and the Like at Social Welfare Facilities

Kaichiro UMEZAWA

要 旨

平成10年度入学者より、小学校並びに中学校の教諭の普通免許状授与する者に、特別支援学校¹⁾2日間、社会福祉施設5日間の計7日間の介護等体験が義務づけられた。

本研究では、平成18年度の体験結果を事前及び事後に体験学生からのアンケート及び体験実施報告書から体験実施にともなう問題点を明らかにし、今後の事前指導にいかしていくことを目的とする。

体験前の不安感等については、「体験意欲感」、「知的興味感」、「利用者との関り不安感」、「生活常識不安感」は他大学²⁾とほぼ同じ結果であったが、「体験混乱不安感」は他大学より9.4ポイント低く、逆に「失敗不安感」は、14.2ポイント高いことが明らかにされた。

この改善策として、体験開始日がオリエンテーション実施の体験先につき、事前に見学やボランティア等の事前体験が他大学に比較して必要と思われる。

次に、事後の達成感では、「体験全体」では、達成感は85%であり、「ある程度えられている」。

達成項目別では、「介護業務」、「自己覚知」は共に92.5%であったが、続いて「利用者理解」が90%、「福祉理解」が87.5%、「職員理解」や「体験支援」は82.5%となっており、主たる体験目標としての「介護業務」、「自己覚知」は、かなり達成されている。

施設種別では、障害者施設が85%、老人施設が82.5%で達成感が高かった。

但し、介護業務で、達成感が低い順に、知的障害者更生施設62.5%、宅老所75%で低い。

個々の達成項目では、「福祉理解」、「自己覚知」、「利用者理解」では同じ達成感であったが、「職員理解」、「体験支援」では、障害者施設の方が高齢者施設より20ポイント達成感が低いことが明らかにされた。「利用者理解」では、宅老所が81.3%で一番低く、続いて、身体障害者小規模通所授産施設、知的障害者通所更生施設が共に82.5%で低い。

*教授 社会福祉学・精神保健福祉学

以上の調査結果並びに学生からの介護等体験実施報告書を加味して検討した結果、達成感が低い施設は、重度の障害のある利用者が多いが、職員の手が薄いために介護に追われ、体験学生に対する指導への時間の捻出が難しいこと、高齢者の施設では認知症の高齢者への手がかかり、学生も対応が難しいこと等が原因と考察される。(表 10 参照)

以上から、障害者施設では、重度の障害者への対応、高齢者施設の内、宅老所、老人デイサービスセンターでは認知症高齢者の割合が高いことから、事前見学を含めた事前指導が必要である。また、老人デイサービスセンターの体験施設全体に占める割合が 46% と高く、認知症対策に偏重傾向になりがちであったが、今後は、重度障害者への対応についても十分に事前指導していくことが必要であることが明らかにされた。(表 2, 図 3 参照)

キーワード：小学校及び中学校教諭普通免許状、介護等体験、社会福祉施設、体験達成感

1. はじめに

「介護等体験特例法」³⁾の制定により、平成 10 年度入学者より、小学校並びに中学校の教諭の普通免許状授与する者に、特別支援学校 2 日間、社会福祉施設 5 日間の計 7 日間の介護等体験が義務づけられた。

本大学においては、3 年次に介護等体験を実施ということで平成 12 年度から、介護等体験を実施し、平成 18 年度までに、338 人が終了した。⁴⁾(表 1. 図 1 参照)

体験実施の事前指導は当初のガイダンス方式から、平成 12 年度からは 2 年次から 3 年次の体験開始までに 5 回程度、授業時間以外の時間に特別講座方式⁵⁾にて実施してきた。

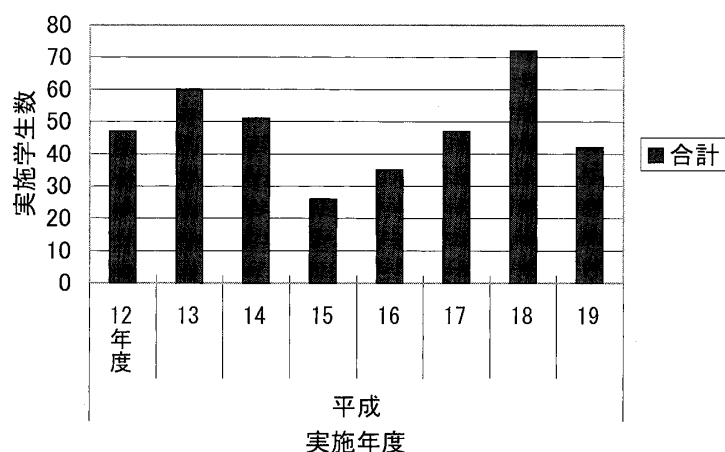


図 1 介護等体験学生数の推移

介護等体験における自己達成感に関する研究

表1 介護等体験学生数の推移

学部	学科	平成 12年度	13	14	15	16	17	18	19	計
文学部	国際英語学科	15	21	17	7	7	12	27	5	111
	史学科	11	10	5	6	8	8	11	9	68
	心理学科	2	3	1	0	0	5	3	0	14
	計	28	34	23	13	15	25	41	14	193
教育学部	情報コミュニケーション学科	9	4	6	1	0	5	2	4	31
	社会教育学科	9	22	13	6	14	9	12	9	94
	計	18	26	19	7	14	14	14	13	125
人間文化学部	日本文化学科	0	0	7	5	4	7	15	11	49
	観光文化学科	0	0	0	0	2	1	2	1	6
	生活文化学科	0	0	2	1	0	0	0	3	6
	計	0	0	9	6	6	8	17	15	61
大学院	生涯学習学専攻	1	0	0	0	0	0	0	0	1
合 計		47	60	51	26	35	47	72	42	380

- 【備考】 1. 本学では3年次で、介護体験を実施しているが開始年度の12年度～19年度の体験実施学生の学科別数を示す。
 2. 学科名は、国際英語学科、情報コミュニケーション学科、生活文化学科は、それぞれ、英語英文学科、情報教育学科、生活環境学科から名称変更し、19年度の学科名称で表示。

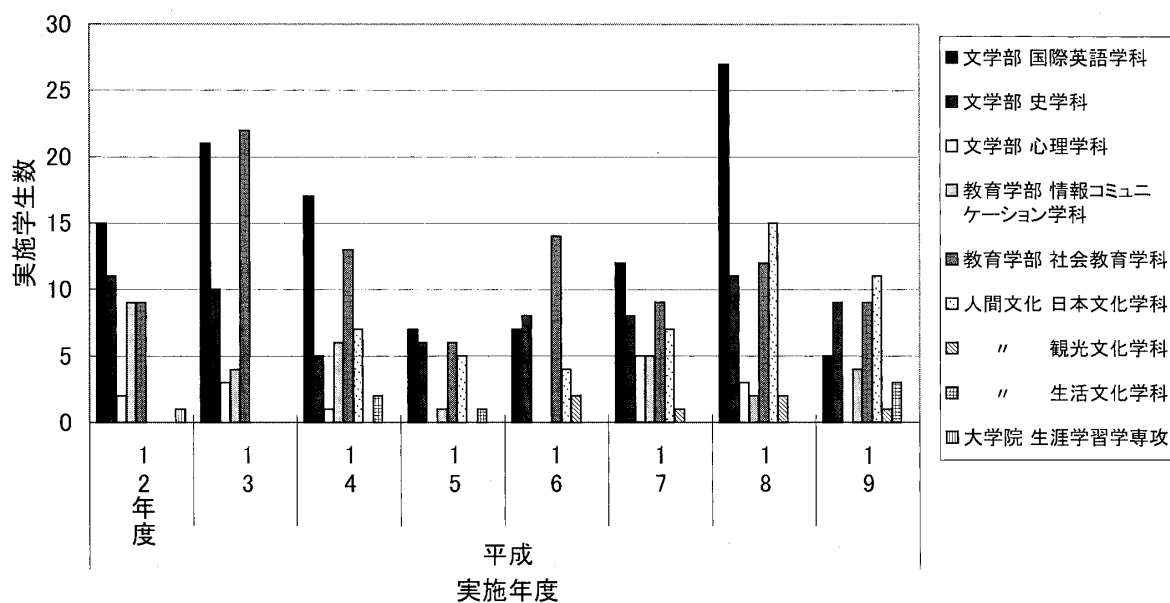


図2 学科別介護体験学生数の推移

表2 介護等体験先の配属先社会福祉施設種別の年度別推移

区分	施設種別	12年度	13年度	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度	計
老人福祉施設	特別養護老人ホーム	12	15	18	11	3	7	1	3	70
	老人デイサービスセンター	6	14	14	6	14	1	33	13	101
	養護老人ホーム	0	0	0	1	0	1	0	0	2
	介護老人保健施設	2	1	1	0	1	5	0	6	16
	有料老人ホーム	2	1	0	2	0	4	3	0	12
	宅老所	0	0	0	0	0	17	1	5	23
	老人福祉施設計	22	31	33	20	18	35	38	27	224
障害者福祉施設	身体障害者療護施設	1	0	0	1	0	0	0	0	2
	身体障害者授産施設	0	0	0	1	0	0	0	0	1
	身体障害者通所授産施設	10	10	6	0	6	5	15	2	54
	身体障害者小規模通所授産施設	0	0	0	0	0	0	1	1	2
	身体障害者デイサービスセンター	1	0	0	0	0	0	0	0	1
	身体障害者施設計	12	10	6	2	6	5	16	3	60
	知的障害者更生施設	7	5	4	2	4	2	1	0	25
	知的障害者通所更生施設	2	1	0	0	3	1	5	0	12
	知的障害者入所授産施設	0	2	3	2	0	0	0	3	10
	知的障害者通所授産施設	2	7	3	0	0	0	11	8	31
	知的障害者小規模通所授産施設	0	0	0	0	0	0	1	0	1
	知的障害者施設計	11	15	10	4	7	3	18	11	79
	障害者施設計	23	25	16	6	13	8	34	14	139
児童福祉施設	児童養護施設	0	2	0	0	0	0	0	0	2
	知的障害児通園施設	1	0	0	0	4	3	0	1	9
	肢体不自由児通園施設	1	0	1	0	0	1	0	0	3
	重症心身障害児施設	0	2	1	0	0	0	0	0	3
	児童福祉施設計	2	4	2	0	4	4	0	1	17
合計		47	60	51	26	35	47	72	42	380

平成21年度からは介護等体験の事前・事後指導は、授業として単位化を予定している。⁶⁾

単位化を目前にし、過去7年間の介護等体験現状を回顧し、その問題点を明らかにしていくことが急務となっている。

2. 研究目的

本研究は、特別支援学校においては、これまで問題もなく、体験目標もほぼ達成しているところから、社会福祉施設の体験に絞り、平成18年度の体験実施学生の事前、事後のアンケート

ト調査から、体験前の不安感等を他大学と比較検討するとともに、体験実施後では、体験施設種別毎に達成領域別に達成状況を分析し、今後の単位化後の事前指導並びに事後指導に活かすことを目的とするものである。

3. 研究対象と方法

介護等体験実施前並びに実施後提出の介護等体験実施報告書に基づき下記のとおりアンケートを実施し、その結果を検討し分析する方式をとった。

(1) 体験実施前のアンケート調査

ア. 実施目的

現在の学校は、いじめ、不登校や学級崩壊など多くの問題を抱えている。

このため、これから教職に携わる学生に、介護の体験を通して人の気持ちを理解することや、人の心の痛みを感じることができる先生になって欲しいとの考えに基づいて法制化された。⁷⁾

かかる介護等体験の立法趣旨を踏まえ、他者の気持ちを理解するためには、他者が感じている自分を理解するという「自己覚知」が大切になる。

かかる視点に立ち、介護等体験に対する興味・関心・不安の気持ち、自分の行動の特徴、ストレスについて自己分析することの重要性に鑑みアンケートを実施する。

イ. 実施日

平成18年4月6日 介護等体験第3回出席者72名に配布し、提出する方式をとった。

72名配布し53名回答。アンケート回収率は、73.6%であった。

アンケート協力者の実習先種別は、この時点では判明していない。判明するのは、5月中旬頃例年判明するため、判明後に介護等体験直前講座を実施している。

なお、アンケート項目については、(株)日本人材開発医科学研究所による「対人援助の自己チェック」⁸⁾に準拠し実施した。

ウ. 実施方法

アンケートのチェック項目は、表3に示したとおりの30項目あり、各項目について、その項目にあてはまる評価尺度6項目別に各項目5設問が該当し、設問毎に、評価項目が、下記のとおり、4つの評価になっている。設問に対して、該当番号は、次のとおりである。(表4、図4、表5、図5参照)

該当番号「1」=「あてはまらない」で1点加算する。

該当番号「2」＝「あまりあてはまらない」で2点加算する。

該当番号「3」＝「ややあてはまる」で3点加算する。

該当番号「4」＝「あてはまる」で4点加算する。

6つの評価尺度は、各5つの設問が該当するので、各評価項目は20点満点となる。

エ. 6つの評価尺度項目

評価尺度項目、6つの評価尺度項目となる。

表3 介護等体験興味関心アンケート項目

あるか	アンケート該当番号	尺度記号
1. 介護の現場で働いている人と話したい。	1・2・3・4	①
2. 介護の仕事はどんなものかを知りたい。	1・2・3・4	⑥
3. 介護体験がなり、行きたくなくなるかもしれない。	1・2・3・4	③
4. 障害者や老人への接し方がわからない。	1・2・3・4	⑤
5. 介護現場の職員や教員に厳しく指導されるかもしれない。	1・2・3・4	②
6. 寝坊や遅刻をしてしまいそうで心配だ。	1・2・3・4	④
7. ボランティア活動をやってみたい。	1・2・3・4	①
8. 福祉施設や養護学校がどんなところか知りたい。	1・2・3・4	⑥
9. 障害者や老人から話しかけられたとき、どのように対応してよいかわからない。	1・2・3・4	⑤
10. 障害者や老人にきられるのではないかと心配だ。	1・2・3・4	②
11. 介護体験を通して、自分をみつめたい。	1・2・3・4	①
12. 介護体験中に自分の行動を非難されるのではないかと心配だ。	1・2・3・4	②
13. 障害者や老人にふりまわされて、收拾がつかなくなりそうだ。	1・2・3・4	③
14. あいさつや返事がきちんとできるかどうか心配だ。	1・2・3・4	④
15. 介護用品にどんなものがあるか知りたい。	1・2・3・4	⑤
16. 介護体験でプライベートな時間が減るのが心配だ。	1・2・3・4	③
17. 言葉のかけ方がわからないので心配だ。	1・2・3・4	⑤
18. 服装などを注意されるかもしれない。	1・2・3・4	④
19. 本当はやりたくないが、仕方なくやる。	1・2・3・4	①
20. 福祉資格にはどんなものがあるか知りたい。	1・2・3・4	⑤
21. 仕事がいやになり、態度や顔にでそうだ。	1・2・3・4	③
22. 初めての体験なので何をしたらよいかわからない。	1・2・3・4	⑤
23. 介護現場の職員や教員とうまくできるかどうか心配だ。	1・2・3・4	②
24. 福祉施設や養護学校で何をやらされるか心配だ。	1・2・3・4	④
25. 介護体験を通して、自分にどんなことができるかを試したい。	1・2・3・4	①
26. 福祉サービスにはどんなものがあるか知りたい。	1・2・3・4	⑥
27. いろいろ気をつかって精神的に疲れそうだ。	1・2・3・4	③
28. 私はボランティア体験があるので不安はない。	1・2・3・4	⑤
29. 予想外の質問がでたらパニックになりそうだ。	1・2・3・4	②
30. オシャレ、アクセサリ、化粧などが、どの程度許されるか気がかりだ。	1・2・3・4	④

介護等体験における自己達成感に関する研究

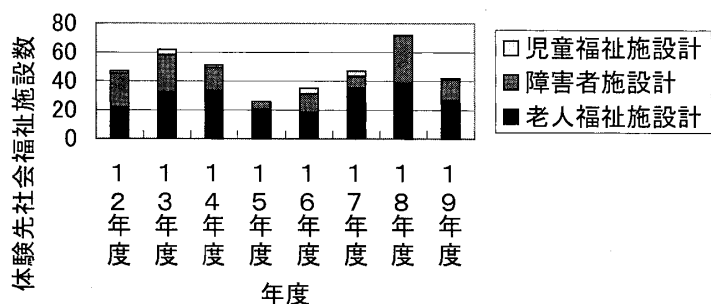


図3 介護等体験先社会福祉施設種別の推移

表4 介護等体験前興味関心アンケート結果

分類番号	尺度内容	本学	他大学
①	体験意欲感	15	14.8
②	失敗不安感	14.5	12.7
③	体験混乱不安感	12.5	13.8
④	生活常識不安感	11	10.5
⑤	関わり不安感	15.1	14.6
⑥	知的興味感	14.6	14.8
	平均	13.8	13.5

表5 各尺度の得点分布状況

点数/20	①	②	③	④	⑤	⑥
～5	0	0	0	2	0	0
6～7	1	1	3	5	1	0
8～9	1	2	2	9	1	3
10～11	3	7	12	17	6	5
12～13	10	9	19	11	7	10
14～15	13	17	11	6	13	17
16～17	14	9	3	2	15	8
18～19	8	4	3	1	7	6
20	3	4	0	0	3	4

【備考】1. 点数は、各尺度での20点満点中の得点。

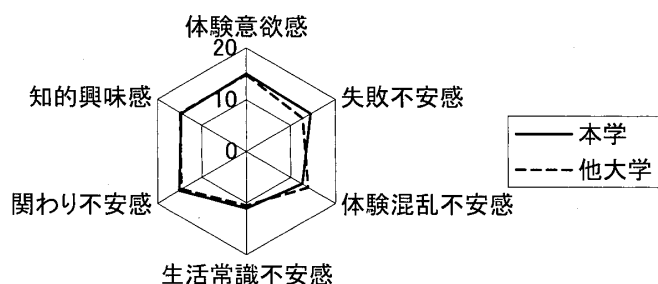


図4 介護等体験前興味関心アンケート結果

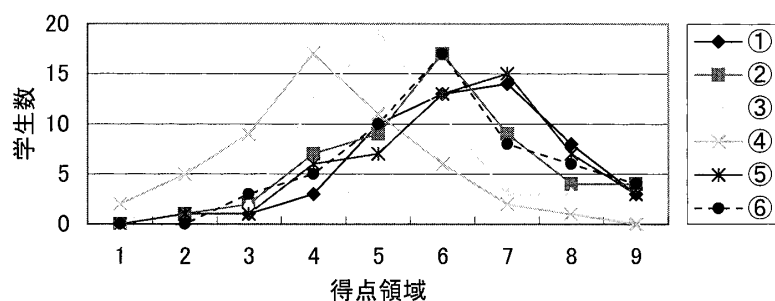


図5 各尺度得点分布状況

以下、6つの評価尺度項目の内容について説明したい。

① 体験意欲感

介護体験を前向きに生かそうとしている姿勢である。

得点が高い程意欲的にこの機会に対して期待を持っている。

この得点が低い場合は、介護等体験の目的をよく考えて、関心の持てることを見つけるようにする必要がある。

② 失敗不安感

体験先の利用者や職員から、自分が受け入れられるかを不安に思う程度を示す。

高い場合は、受け入れられないと思う気持ちが大きいことを示している。

自分で自分を否定的に考えがちなので、完璧にやろうと思うより失敗から学ぶくらいの気持ちを持つことが大切である。

③ 体験混乱不安感

体験中に自分のペースが乱されて、不快な気分を感じ、途中でやめてしまうかもしれないなどの心配を持つ場合である。

かかる場合は、余り心配せず、自分が貢献できると思うことを教職・資格相談室や特別講座の先生に相談するなどし、できそうなところから一つ一つ実行していくことが大切である。

④ 生活常識不安感

挨拶や服装、時間管理等、基本的なマナーに対する不安の程度を示す。

高い場合は、マナーや礼儀に対する不安感じている場合である。

挨拶の励行や朝早く起きる練習等に留意していく必要がある。

⑤ 関わり不安感

利用者とのどのように関わったらよいのかという不安である。

高い場合は、障害者や認知症の方への関わりなどの不安が予想される。

教科書や特別講座で学んだり、ボランティアや施設見学など事前体験によりかかる不安は解消される。

⑥ 知的興味感

介護に関する様々な事柄への知的な興味を示している。

高い場合は、介護に関連する知識を得たいという気持ちを多く持っている場合である。

体験施設に関する知的興味を実践に移していくことが必要である。

介護等体験における自己達成感に関する研究

(2) 体験後の体験満足度チェックアンケート

平成 18 年 6 月から平成 19 年 2 月までの介護等体験終了時に、体験満足度チェックアンケート並びに、記述式による介護等体験実施報告書を提出する方式とする。

ア. アンケート回収率

72 名配布し 64 名が回答。アンケート回収率は、88. 9%であった。

回収率の状況は、表 6 のとおりである。(併せて、図 6、図 7、表 7、表 8 参照)

(3) アンケート項目及び体験領域構成等

アンケート項目並びに体験領域構成は、表 9 のとおりである。

アンケート項目では、16 項目となっている。

体験領域の構成では、「大区分」、「中区分」、「小区分」毎に各 7 区分となっている。「大区分」は、「体験全体」、「福祉理解」「自己覚知」「利用者理解」、「介護業務」、「職員理解」及び「体験支援」である。

表 6 アンケート協力者の施設種別及び介護等達成感の状況

区分	施設種別	体験者	アンケート協力者	アンケート回収率	体験達成感の内訳 (%)							全体 得点 満点 64 点	全体 達成率 (%)
					体験 全体	福祉 理解	自己 覚知	利用者 理解	介護 業務	職員 理解	体験 支援		
老人 福祉 施設	特別養護老人ホーム	1	1	100	87.5	100	87.5	100	100	82.5	100	58	96
	有料老人ホーム	3	3	100	80	80	87.5	92.5	92.5	77.5	75	54	84
	老人入所施設	4	4	100	82.5	87.5	87.5	90	95	80	80	56	87
	老人アイサービスセンター	33	28	84.8	87.5	82.5	90	87.5	87.5	92.5	92.5	56	88
	宅老所	1	1	100	87.5	100	100	81.3	75	82.5	75	55	86
	老人通所施設	34	29	85.3	90	87.5	92.5	90	90	90	95	56	88
	老人福祉施設	38	33	86.8	82.5	87.5	92.5	90	95	92.5	92.5	56	88
障害者 福祉 施設	身体障害者通所授産施設	15	15	100	87.5	80	92.5	85	87.5	85	95	55	87
	身体障害者小規模通所授産施設	1	1	100	100	100	100	82.5	87.5	100	100	60	94
	身体障害者施設	16	16	100	85	85	95	85	87.5	85	95	55	87
	知的障害者更生施設	1	1	100	75	100	50	87.5	62.5	50	100	49	77
	知的障害者通所更生施設	5	5	100	87.5	87.5	90	82.5	90	90	85	56	88
	知的障害者通所授産施設	11	9	82	90	95	95	92.5	95	95	92.5	60	94
	知的障害者小規模通所授産施設	1	0	0									
	知的障害者施設	18	15	83.3	85	92.5	92.5	90	92.5	90	90	58	91
	障害者施設	34	31	91.1	85	87.5	92.5	87.5	90	72.5	70	56	89
合 計		72	64	88.9	85	87.5	92.5	90	92.5	82.5	82.5	56	88

【備考】 1. 得点と達成率との関係のめやすについては、下記のとおりとする。

達成状況	かなりえられた	ある程度得られた	少し得られた	余り得られなかった
64 点満点	56 点以上～64 点	40 点～56 点未満	24 点以上 40 点未満 1	16 点以上～24 点未満
100 点満点	93 点以上～100 点	62.5 点以上 93 点未満	37.5 点以上 62.5 点未満	25 点以上 37.5 点未満
4 段階 (アンケート)	3.72 ～ 4	2.5 ～ 3.72	1.5 ～ 2.5	1 ～ 1.5
表示	A	B	C	D

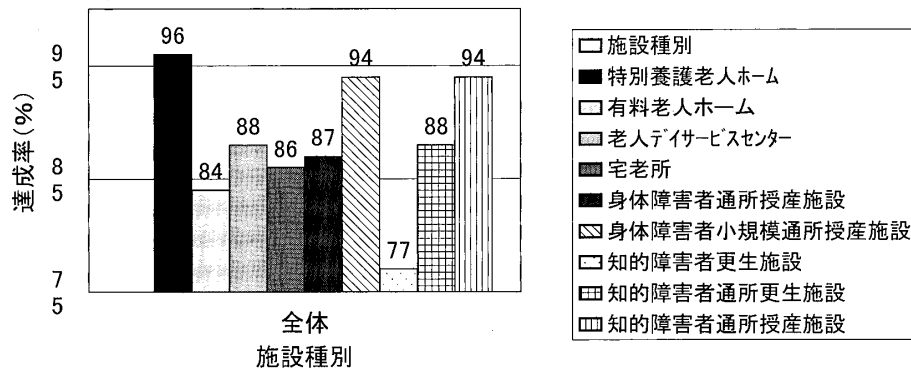


図6 介護等体験の施設種別別達成率状況

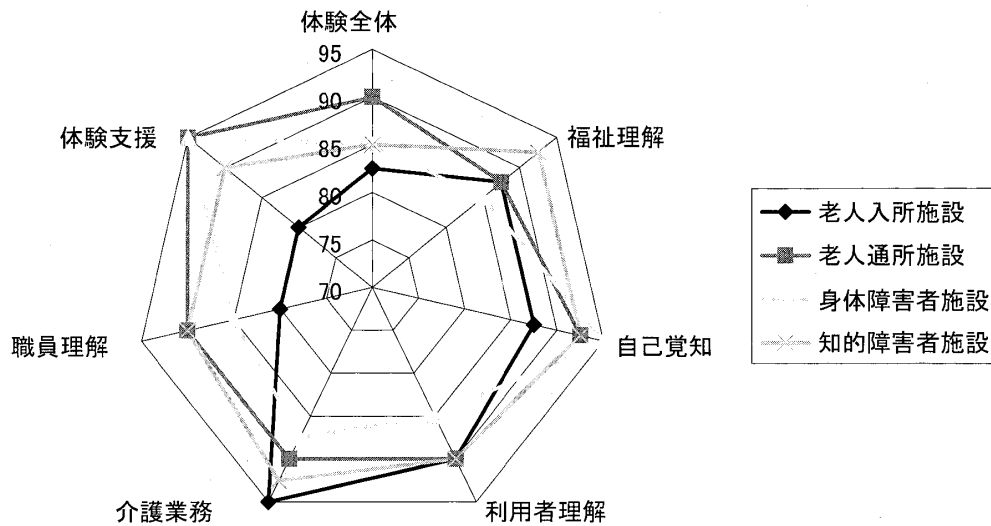


図7 施設種別の介護等体験達成感の状況

なお、「中区分」、「小区分」の内容並びにアンケート項目との関係については表6に記したとおりであり、「大区分」の「体験全体」は、アンケート項目の3, 12であり、「福祉理解」は、アンケート項目の14, 17であり、「自己覚知」は、アンケート項目の11, 16であり、「利用者理解」は、アンケート項目の4, 9, 10, 15であり、「介護業務」は、アンケート項目の2, 8であり、「職員理解」は、アンケート項目の1, 13, 16であり、「体験支援」は、アンケート項目の5で構成されている。

設問毎に評価項目が下記のとおり、4つの評価になっている。

評価番号は、次のとおりである。

評価番号「1」＝「あてはまらない」で1点加算する。

評価番号「2」＝「あまりあてはまらない」で2点加算する。

介護等体験における自己達成感に関する研究

表7 介護等体験領域別・施設別達成状況アンケート調査集計表（老人福祉施設）

達成領域	アンケート 番号	老人福祉施設						
		高齢者入所施設			高齢者通所施設			平均得点 4点満点
		特養ホーム	有料老人ホーム	計	老人デイ	宅老所	計	
		1カ所	3カ所	4ヶ所	28カ所	1カ所	29ヶ所	
体験全体	3	4	11	15	110	3	113	3.8
	12	3	8	11	92	4	96	3.2
	計	7	19	26	202	7	209	3.5
福祉理解	14	4	11	15	97	4	101	3.4
	7	4	8	12	97	4	101	3.4
	計	8	19	27	194	8	202	3.5
自己覚知	11	3	9	12	96	4	100	3.4
	6	4	12	16	112	4	116	4
	計	7	21	28	208	8	216	3.7
利用者理解	4	4	10	14	99	3	102	3.5
	9	3	12	15	101	3	104	3.6
	15	3	10	13	96	3	99	3.4
	10	4	12	16	114	4	118	3.9
	計	14	44	58	410	13	423	3.6
介護業務	8	4	11	15	101	3	104	3.6
	2	4	11	15	110	3	113	3.9
	計	8	22	30	211	6	217	3.7
職員理解	1	3	9	12	109	3	112	3.8
	16	4	10	14	101	3	104	3.6
	13	3	9	12	109	4	113	3.8
	計	10	28	38	319	10	329	3.7
体験支援	5	4	9	13	106	3	109	3.7
平均得点	得点／ 64点	58	54	56	56	55	56	*
	100点 満点	91	84	87	88	86	88	

【備考】 1. $3.9 = 1,923 \div 33 \div 15$

評価番号「3」＝「ややあてはまる」で3点加算する。

評価番号「4」＝「あてはまる」で4点加算する。

設問は16問あるので、満点は、60点（＝16×4）となる。

表8 介護等体験領域別・施設別達成状況アンケート調査集計表（障害者福祉施設）

達成領域	アンケート番号	障害者福祉施設								総合計	
		身体障害者施設			知的障害者施設			合計	平均得点 4点満点	(老人+障害)	
		通所授産	小規模授産	計	入所更生	通所更生	通所授産			合計	平均得点
体験全体	3	57	4	61	4	20	35	120	3.9	246	3.8
	12	44	4	48	2	15	26	91	2.9	198	3.1
	計	101	8	109	6	35	61	211	3.4	439	3.4
福祉理解	14	50	4	54	4	18	35	92	2.9	204	3.2
	7	50	4	54	4	17	33	108	3.5	221	3.5
	計	100	8	108	8	35	68	219	3.5	448	3.5
自己覚知	11	52	4	56	2	16	33	107	3.5	219	3.4
	6	60	4	64	4	20	36	124	4	256	4
	計	112	8	120	6	36	69	231	3.7	475	3.7
利用者理解	4	50	3	53	4	17	35	105	3.4	221	3.5
	9	49	3	52	4	17	35	108	3.5	227	3.5
	15	48	3	51	2	15	31	99	3.2	211	3.3
	10	55	4	59	4	17	32	112	3.6	246	3.8
	計	202	13	215	14	66	133	428	3.5	909	3.6
介護業務	8	53	4	57	3	18	34	110	3.5	238	3.7
	2	52	3	55	2	18	35	110	3.5	238	3.7
	計	105	7	112	5	36	69	222	3.6	439	3.4
職員理解	1	52	4	56	2	19	35	112	3.6	236	3.7
	16	48	4	52	2	16	32	102	3.3	220	3.4
	13	53	4	57	2	19	36	93	3	218	3.4
	計	153	12	165	6	54	103	266	2.9	633	3.3
体験支援	5	57	4	61	4	17	33	87	2.8	209	3.3
平均得点	得点/64点	55	60	55	49	56	60	56	*1		*2
	100点満点	87	94	86	77	88	94	89	3.6	3552	3.7

【備考】1. *1=3.6=1664÷31÷15

2. *2=3.7=3552÷64÷15

表9 アンケート項目から、体験領域の構成表

番号	大区分	中区分	小区分	アンケート項目番号	アンケート内容
1	体験全体	体験評価	体験自己評価 体験先評価	3 12	このような体験ができてよかった。 施設や養護学校1)で自分の行動が認められた。
2	福祉理解	関心と参画	福祉への関心 福祉への参画	14 7	福祉に対する関心が高まった。 ボランティア活動をやってみたいと思うようになった。
3	自己覚知	自己覚知と 社会人の自覚	自己覚知 社会的訓練	11 6	介護体験を通して自分を見つめることができた。 寝坊や遅刻をしないで無事にやり遂げられた。
4	利用者理解	利用者との コミュニケーション と理解	利用者コミュニケーション 利用者理解	4 9 15 10	障害者や老人とうまく接することができた。 障害者や老人とうまく話すことができた。 老人や障害者と気持ちが通じ合えた。 障害者や老人とうまく話げできた。
5	介護業務	介護業務の 理解	施設理解 介護業務理解	8 2	福祉施設や養護学校がどんなところかわかった。 介護の仕事がどんなものかわかった。
6	職員理解	職員との対話と理 解	施設職員との対話 と理解	1 16 13	介護現場で働いている人と話ができた。 施設で働く人の気持ちがわかった。 介護体験を通して色々な人と知り合えた。
7	体験支援	施設・大学・県 社協の支援	施設職員の支援 担当教員の支援	5	介護現場の職員や教員がやさしく接してくれた。

【備考】1. 注1)「養護学校」は、「特別支援学校」に呼称変更された。

介護等体験における自己達成感に関する研究

表 10 介護等体験実施報告状況

項目	内容	老人福祉施設		障害者施設		知的障害 通所	計
		入所	通所	入所	通所		
A. 体験 内容	1. 介助（食事・トイレ・移動等）	1	0	2	11	2	16
	2. 認知症の方のお手伝い（話し相手・お茶だし・レクリエーション・整髪等）	1	15	0	0	0	16
	3. 内部授産作業（パンづくり・椎茸栽培等）	0	0	0	1	13	14
	4. 外部授産作業	0	0	0	0	6	6
	5. 掃除（含む、トイレ）	1	0	0	1	2	4
	6. 散歩付き添い、テーブル拭き、車椅子介助・ラジオ体操等	0	2	0	1	0	3
	7. レクリエーション支援	1	1	0	0	1	3
B. 学び	1. 利用者一人一人様々な個性があること。	0	3	0	0	4	7
	2. 一人一人違った対応のとり方があること。	0	5	0	1	3	9
	3. 言葉だけでなく、表情や体を使ってコミュニケーションをとること。	0	0	1	1	1	3
	4. 何でも手を差しのべず、暖かく見守ること。	0	0	0	1	1	2
	5. 支援の方法	0	0	0	1	1	2
	6. 相手の気持ちを汲み、思いやり、理解することの大切さ	0	2	0	3	0	5
	7. 健常者も障害者も同じ目線で、心を通わせ交流することの大切さ。	0	0	0	2	1	3
C. 指導 事項	1. コミュニケーションのとり方	1	8	1	1	2	13
	2. 介助方法（食事・手洗い・車椅子・水分補給等）	0	1	1	3	1	6
	3. 自立しているのに、介助をお願いする方の事前確認	0	0	0	1	2	3
	4. 作業の際の一人一人にあった支援方法	0	1	0	0	3	4
D. 自己 目標達 成状況	1. コミュニケーションをとることにつき、達成した。	1	14	0	5	7	27
	2. 毎日の日課の目標を達成した。	1	14	1	4	1	21
	3. 一人一人の障害に応じた支援の目標を達成した。	0	0	0	2	0	2
E. 驚き	1. 利用者は体験学生が大好きだと聞かされた。	0	0	0	2	2	4
	2. 職員の利用者への観察力	0	0	1	1	0	2
F. 反省 点	1. 何でも聞いてやってしまったことの反省	1	0	0	0	1	2
	2. 職員が忙しく聞きにくかった。でも聞くべきであった。	0	0	0	1	1	2
	3. 認知症について学んでから体験すべきだった。	0	3	0	0	0	3
G. 大学 事前指 導	1. 体験者のコメントをもっと聞きたかった。	0	0	0	2	1	3
	2. 老人介護だけでなく、障害者のことも詳しく示して欲しい。	0	0	0	1	1	2
	3. 車椅子介助方法、認知症の方はどうな方が事前学習を。	0	1	1	2	0	4
H. 先輩 の助言	1. 事前にボランティア、見学等で、施設や利用者の事前確認を。	0	2	0	0	2	3
	2. 積極的に話しかければ得るもの大きい。	0	1	0	2	0	3
	3. 分からないことは、職員に聞いて対応する。	0	1	0	0	1	2

【備考】 1. 平成 18 年度実施の介護等体験実施終了学生 72 名の「介護等体験実施報告書」で、2 名以上の内容のみの集計である。
2. 「知的障害通所」とは、「知的障害者通所授産施設」を示す。

4. 結果

(1) 体験実施前のアンケート調査結果

体験前の不安感等を他大学と比較検討した結果は、表4及び表5のとおりである。

この表から、「生活常識不安感」が本学並びに他大学ともに一番低く（本学が55%，他大学が52.5%），次いで、「体験混乱不安感」，「失敗不安感」と続き、「体験意欲感」は、本学（75%）並びに他大学（74%）で高い。本学は、「関わり不安感」（75.5%）が一番高い。

「体験意欲感」，「知的興味感」，「利用者との関り不安感」，「生活常識不安感」は他大学（8大学1,989名）とほぼ同じ結果であった。相違点としては、本大学生の「体験混乱不安感」は9.4ポイント低く、62.5%であった。

逆に「失敗不安感」は、14.2ポイント高く、72.5%であった。

(2) 介護等体験実施後のアンケート結果

ア. 達成感のアンケート結果

次に、介護等体験実施後の達成感では、「体験全体」では、達成感85%であった。

達成項目別では、「介護業務」，「自己覚知」は共に92.5%であったが、続いて「利用者理解」が90%、「福祉理解」が87.5%、「職員理解」や「体験支援」は82.5%となっており、主たる体験目標としての「介護業務」，「自己覚知」は4段階ではほぼAランク（表6の備考参照）であり、ほぼ達成された。

施設種別では、障害者施設が85%、老人施設が82.5%で達成感が高かった。

但し、介護業務で、達成感が低い順に、知的障害者更生施設62.5%、宅老所75%で低い。

個々の達成項目では、「福祉理解」，「自己覚知」，「利用者理解」では同じ達成感であったが、「職員理解」，「体験支援」では、障害者施設の方が高齢者施設より20ポイント達成感が低いことが明らかにされた。「利用者理解」では、宅老所が81.3%で一番低く、続いて、身体障害者小規模通所授産施設、知的障害者通所更生施設が共に82.5%で低い。

イ. 介護等体験実施報告結果

実施報告者64名のうち、内容が2名以上同じ内容につき、集計したものが、表10のとおりである。

体験内容、学び、体験先の指導職員からの指導事項、自己目標達成状況、体験での驚き、反省点、大学での事前指導に対する感想や提言、実習体験を終えての在校生への応援メッセージが記されている。以下、その概要は下記のとおりである。

① 体験内容

障害者施設では、介助、授産作業が多い。

高齢者施設、特に老人デイケア施設では、認知症の方のお世話が多くなっている。

共通して、掃除、散歩の付き添い、レクリエーション支援等となっている。

② 学び

利用者の個性、尊厳に留意し、相手の気持ち、思いやりを持って接するとともに、一人一人にあった介助や支援が必要であること。

また、高齢者施設並びに障害者施設に共通して、残存機能を維持するためにも、何でも手をさしのべるのではなく、暖かく見守ることも大切であることを学んでいる。

③ 指導事項

施設職員からの指導内容は、コミュニケーションのとり方が多く、それも言葉だけでなく表情や体で表現するという非言語的コミュニケーションの大切さも指導されている。

また、障害者の施設では、施設内、施設外での授産支援方法も指導されている。

③ 自己目標達成状況

自己目標としては、コミュニケーションをとること、日々の目標については、ほぼ達成された。

④ 驚き

職員が忙しく働いているのに、利用者の変化を見逃していないという観察力に驚かされている。

⑤ 反省点

利用者の希望に何でも応えてしまったが、残存能力の活用から見守りの大切さを痛感した。認知症について、自分でももう少し学んでから体験すべきであったとの反省もなされている。

職員が忙しく、利用者のことで聞きたかったが、聞けずに終わり、聞くべきであったとの反省もあった。

なお、大学への事前指導や後輩への応援メッセージについては、考察と結論で紹介したい。

5. 考察と結論

(1) 体験実施前のアンケート調査結果から

「体験意欲感」、「知的興味感」、「利用者との関り不安感」、「生活常識不安感」は他大学（8

大学 1,989 名) とほぼ同じ結果であった。

「体験意欲感」は、本学並びに他大学でも一番高いのに対し、「生活常識不安感」が本学並びに他大学ともに一番低い。

他大学と比較して、本大学生の「体験混乱不安感」は 9.4 ポイント低く、62.5%であった。

逆に「失敗不安感」は、14.2 ポイント高く、72.5%であった。

この結果からの改善策として、体験開始日がオリエンテーション実施日ということで、体験開始日と同じという体験先につき、事前に見学やボランティア等の事前体験が他大学に比較して必要と思われ、今後の事前指導で生かしていく必要がある。

(2) 介護等体験実施後の達成感のアンケート結果及び介護等体験実施報告から

達成感が低い施設は、重度の障害の利用者が多いが、職員の手が薄いために介護に追われ、体験学生に対する指導への時間の捻出が難しいこと、高齢者の施設では認知症の高齢者への手がかかり、学生も対応が難しいことが原因と考察される。

以上から、障害者施設では、重度の障害者への対応、高齢者施設では、宅老所、老人デイサービスセンターで認知症高齢者の割合が高いことからかかる対応につき、事前見学を含めた事前指導が必要である。

また、認知症の多い老人デイサービスセンターの体験施設全体に占める割合が 46% と高く、認知症対策に偏重傾向になりがちであったことから、重度障害者への対応についても十分に事前指導していくことが必要であることが明らかにされた。

(3) 今後の大学での事前指導について

介護等体験実施報告結果の「大学事前指導」並びに「後輩への応援メッセージ」の内容を踏まえながら、今後の事前指導のあり方につき提言したい。

内容が 2 名以上の場合につき、表 10 で示されている。

ア. 事前指導内容

① 大学での事前学習の内容改善

- ・単位化により、きちんと講義時間を授業時間帯に設定する。
- ・車椅子や認知症の説明を詳しくする。
- ・体験オリエンテーション時、体験初日等の服装のことなどを詳しく施設から聞くようにする
- ・事前に昨年の体験学生のお話を聞く機会を持つ。

- ・体験先が決定した段階で、施設種別毎に集まり、打ち合わせる機会を設ける機会も検討する。
- ・現場で働く受け入れ先の職員からお話を聞く機会を設ける。
- ・事後指導として、報告集を作成し、後輩のために介護等体験報告会を事前指導の一環で実施する。⁹⁾
- ・介護支援内容の学生への徹底
車椅子の操作などこれまでも希望者には実施したが、単位化後は、全員に実施する。
介護技術については、施設によっては危険もともなうため、入浴や排泄は見学程度というところもあるが、介護の基本程度は授業で実施する。
- ・施設案内や施設学習ビデオの活用と学生の活用の配慮を行う。

イ. 千葉県福祉人材センター・施設との連携

体験先発表から体験実施日まで余裕をもって体験に臨めるよう配慮をお願いする。

細菌検査等の準備、事前訪問並びに事前学習時間等への配慮のためである。

ウ. 学生の独自準備

「後輩への応援メッセージ」にも、事前にボランティアや、施設見学、施設最寄り駅から施設までの交通の確認など学生の意欲を喚起するための事前指導を実施する。

以上、今後の事前指導のあり方への提言を学生の実習報告書の大学での事前指導への意見も踏まえ提言をおこなった。

最後に、認知症の方が殆んどという老人デイサービス施設で体験された学生の体験終了後の「介護等体験の目標達成状況」を紹介し結びとしたい。

「当初は不安もかなりあったが、最終日に泣きそうなくらい充実し、さらに交流が持てたと感じた。達成感が凄くある」。

「なかなか自分の思う通りに行動できず惑うことも多かったが、今回このような体験ができて良かった」。

「その人にあったコミュニケーション方法を見つけ、自然と体験の目標を達成しました」。

「毎日、反省点がありましたが、最終日には、全て達成できた」等。

注

- 1 2007年（平成19年）4月実施の改正学校教育法第71条により、「養護学校」より「特別支援学校」に呼称変更された。

- 2 9つの国公立大学、短期大学、専門学校生1,989名。内、教員志望者335名、福祉系資格取得希望者425名他の対人援助職（看護職、心理職）希望者218名、その他の資格取得希望者457名、資格希望予定無し等が551名であった。
- 3 1997年（平成9年）「小学校及中学校の教諭の普通免許状に係わる教育職員免許法の特例に関する法律」
- 4 表1、表2、図1、図2、図3参照。

本大学においては、3年次に介護等体験を平成12年度から、7年間介護等体験を実施し、平成18年度までに338人が終了した。

平成18年度は、団塊世代の教員の大量退職の動きの影響もあり53%増加し72名になったが、19年度は、前年度比42%減少し、42名と急激に減少し、20年度も40名程度が見込まれている。この傾向は18年度入学生より、平成19年6月の教育職員免許法の改正で、10年毎の免許更新制の影響も無関係ではない。

千葉県福祉人材センターの資料によれば、平成18年度の介護等体験学生は、100校（千葉県内、39校2,626名、千葉県外、61校812名）3,438名となっている。受け入れ施設数は267施設。受け入れ可能人員9,019人に対し、3,438人が体験し、131人が体験中止となっている。

受入施設種別では、老人福祉施設が156施設（58%）、知的障害者福祉施設が58施設（22%）、身体障害者福祉施設が24施設（9%）と続き、体験等学生も、老人福祉施設が2,124人（61%）、知的障害者福祉施設が754人（22%）、身体障害者福祉施設が412人（12%）と続いている。

因みに、介護等体験が開始された平成10年度は、実施学校54校、体験学生1,178人に対し、受入れ施設数146施設、実施施設117施設、受入れ可能学生3,244人であった。8年間で、養成学校は1.9倍。体験学生は2.9倍増加している。一方、受け入れ施設は、施設数1.8倍、受け入れ可能学生枠は2.8倍増加している。

- 5 平成13年度から、ガイダンス方式から特別講座方式となる。

実施日は、体験実施前年度に3回、体験実施年度に2回の計5回、昼休みや春休みなどで実施している。実施内容は、社会福祉施設での5日間の体験の留意事項を千葉県福祉人材センターより、我孫子特別支援学校校長から特別支援学校2日間の留意事項を外部講師としてお願いしている。

なお、特別講座ではあるが、欠席の場合は、次回までに補講を義務付けており、平成18年度では、海外研修者7名を含め5回で延べ31名が欠席となり、その補講を7日間にわたり、31名に対し、延12時間程度実施した。

なお、体験施設に訪問指導を実施している大学は、60校中25校で42%の大学で実施している。（平成18年5月13日現在。於いて、法政大学。関東私立大学教職課程連絡協議会研究大会での関東私立大学教職課程連絡協議会第3部会アンケート調査報告から）

本学では、17年度までは、教職課程の担当教員が新規施設や重度障害施設や高齢者施設を中心に各年度10施設程度訪問を実施している。18年度から、体験学生の増加もあり、体験学生の多い学科の先生が補講の多い学生の体験先も対象として訪問を実施することに変更された。

この方式により、平成18年度は5施設に5人の教職課程委員の教員が訪問した。

- 6 介護等体験の単位化の動きについては、千葉県・茨城県私立大学教職課程連絡協議会参加16大学中5大学、約3割で既に単位化している。（平成17年9月16現在）

関東私立大学教職課程連絡協議会のアンケート調査結果では、単位化している大学は回答60校中11大学で、約2割が既に単位化している。（平成17年度現在）

なお、単位化の概要としては、千葉県所在大学の場合は、単位化に踏み切った大学では、1単位が3

介護等体験における自己達成感に関する研究

大学、体験等体験ⅠとⅡで2単位の大学が1校となっている。

東京の大学で2単位となっているある大学の場合は、13回の授業と7日間の介護等体験を併せて2単位としている。(平成18年5月13日、於いて、法政大学。関東私立大学教職課程連絡協議会研究大会でのシンポジスト勤務大学の事例から)

単位化の問題点として、日誌の閲覧の面で、体験学生が多いと大変になること。体験日が最終では2月中旬になり、成績提出期限との関係で厳しい等のコメントが単位化に踏み切った大学でなされている。

(平成17年9月16日、千葉県・茨城県私立大学教職課程連絡協議会からの報告)

7 介護等体験特例法の国会審議における趣旨説明(抜粋)

「…私は、この高齢化・少子化の時代に、将来を見据えた教員の資質向上の一貫として、また、長い目で見て日本人の心のやさしさを甦らせることに繋がるものとして、いじめの問題など困難な問題を抱える教育の現場で、これから活躍される方々が、高齢者や障害者に対する介護等の体験を自らの原体験として持ち、また、そうした体験を教育の場に活かして行くことによって、人の痛みが分かる人づくり、各人の価値観の相異を認められる心を持った人づくりの実現に資することを期待しています」

8 外島・増田・藤野『介護等体験ワークブック』, (株)日本人材開発医科学研究所, 2002年。

「対人援助のための自己チェック」アンケート様式が添付。

9 介護等体験報告会

この件については、平成19年度 介護等体験直前講座(平成19年5月18日)のアンケート結果でも、アンケート協力者20名中17名(81%)が実施を希望している。

その理由を、下記、自由記入で述べている。

- ・勉強になる
- ・行く前に聞くことで理解が深められる。
- ・どのようなことをするのか全くわからないため。
- ・自分たちが何をしなければいけないか心構えがわかる。
- ・他の方がどうだったか知りたい。
- ・色々な意見が聞ける。
- ・今後の自分の体験に役立つ。
- ・次の体験予定学生も含めて実施を。
- ・2人の先輩から介護等体験特別講座で報告を聞きましたが、各施設の報告も聞いてみたかった。

以上の、学生の声も踏まえ、単位化後は、事後指導として配慮することが望まれる。

主な参考文献

1. 外島・増田・藤野『介護等体験ワークブック』, (株)日本人材開発医科学研究所, 2002年。
2. 吉田辰雄編『介護等体験・教育実習の研究』, (株)文化書房博文社, 2000年9月。
3. 中嶋 理編「介護体験マニュアル」, (株)東京法令出版, 2005年4月。